

〔研究ノート〕

アメコミ映画と女性監督

『ワンダーウーマン』を例に

安川知里

はじめに

本稿で目指すのは、ハリウッドで製作されるアメコミ映画を女性監督が撮ることの意味を明らかにすることだ。ハリウッドは世界で最も発達した映画産業都市であり、ここで製作された映画はアメリカ国内のみならず、世界中で上映されその観客や社会に対して大きな影響を与えてきた。しかし、そこには世界中から才能が集まってくるにもかかわらず重要ポストに就く女性はいまだに非常に少なく、男女の賃金格差の問題やセクハラ問題など、ハリウッドにおける女性を取り巻く環境は今なお多くの問題を抱えている。

一方で、製作現場においても作中においても女性の活躍の場が目立つようになりつつあるのも事実だ。第93回アカデミー賞において、アジア系女性であるクロエ・ジャオが監督した『ノマドランド』が、作品賞・監督賞・主演女優賞という主要3部門を受賞したことと、それによりアカデミー賞作品賞及び監督賞を受賞した史上2人目の女性監督となったことが大きな注目を集めた。さらに、昨今の映画界の一つの潮流ともいえるアメコミ原作の映画化においては女性キャラクターがメインの映画が次々に製作されており、この分野で女性監督が登場し始めている。今のアメコミ映画ブームの発端となったマーベル・スタジオによる初の女性メインの映画『キャプテン・マーベル』（2019年）において、この規模の映画としては珍しく女性であるアンナ・ボーデンが、男性と共同ではあるが、監督としてクレジットされた。また2020年は本来であれば女性監督作品の豊作の年となるはずだった。同じアメコミ原作であるDCコミックスの『ハーレイ・クインの華麗なる覚醒 BIRDS OF PREY』で監督・プロデューサーを女性が担当し、コロナ禍を理由に2021年まで公開が延期されているが、マーベル・スタジオの新作『ブラック・ウィドウ』も女性監督が担

当、2017年公開の『ワンダーウーマン』の続編となる『ワンダーウーマン 1984』を前作と同じ女性監督であるパティ・ジェンキンスが担当するなど、少しずつ女性監督の活躍は増えてきている。そこで本稿ではまずハリウッドにおける女性進出の現状を確認し、こうした流れの先駆けとなったDCコミックスの『ワンダーウーマン』を例に、本作の製作体制と作中表現を分析することで、昨今のハリウッドを席卷するアメコミ映画において女性監督は女性の物語をどう描くのか、そこにどんな意味があるのかを明らかにしたい。

ハリウッドにおける女性の今

(1) 製作現場

ハリウッドにおける女性の問題は様々なレベルで起こっているが、まず製作現場においては、監督を担う女性の数が男性に比べて圧倒的に少ないという点が挙げられる。2018年に実施された調査によれば、2007年から2018年の12年間で各年の興行収入ランキング100位以内（全1200作品）に入ったことのある女性監督は47人、男性監督は657人となっている⁽¹⁾。2018年のトップ100位以内で女性が監督した作品は共同監督も含めてわずかに4.5%と、こうした格差が長年続く問題であると同時に現在も大きな改善はされていないことが分かる。

一方で、インディペンデント映画を取り上げるサンダンス映画祭では、2013年のアメリカドラマ部門にノミネートされた16作品のうち半数にあたる8作品を女性が監督しており、現状の格差が性別による能力差に起因するものではないことを示唆している⁽²⁾。実際にこの背景にあるのはリスクを抑えたいと考えるスタジオの姿勢だ。女優であり監督としても活動するジョディ・フォスターは「スタジオは大金を出して誰か監督に任せることになるが、その人が会議で何を言おうと最終的に何が起こるかはわからない。(中略) どれだけ創造的コントロールを奪おうとしても、最終的には監督の決定やヴィジョンによる。結果としてスタジオはリスクが少ないと思われる人を選ぶことになる」と述べており、こうした意思決定プロセスが結果として男性を雇用することにつながってきたことを指摘している⁽³⁾。これは採用の決定権が女性にある場合でも同じだ。1987年にドーン・スティールがコロンビア・ピクチャーズの社長に就任しメジャースタジオを経営する最初の女性となった時も、決定的な変化は起こらなかった⁽⁴⁾。

2012年よりルーカスフィルムの社長となったキャスリーン・ケネディは、『Star Wars』シリーズにおいて女性監督の可能性を聞かれた際、肯定的に答えつつも「映画を一本撮っただけの人物には『Star Wars』のような規模の作品を任せるのではなく、他の作品での経験を与えるべき」という主旨の発言をしている⁽⁵⁾。ここで問題なのは、彼女がここで経験不足とした「一本撮っただけ」の男性監督には既に機会を与えているという点だ。『ローグ・ワン／スター・ウォーズ・ストーリー』を監督したギャレス・エドワースや、『ジュラシック・ワールド』を監督しその後の同シリーズの製作にも関わっているコリン・トレヴォロウは、ケネディによって大役に抜擢されるまでインディーズ映画1、2本ほどの監督経験であり、彼女の判断がジェンダーによって左右されていることを示している⁽⁶⁾。

(2) 作中表現

製作現場における男女の偏りはそこで製作される作品の内容に確実に現れている。2018年の調査によれば、この年の興行収入ランキング100位以内の作品に登場するセリフもしくは名前を持つ女性キャラクターは33.1%で、女性キャラクターが全体の45～54.9%を占めるジェンダーバランスの取れた作品はわずか9%に過ぎない⁽⁷⁾。さらに登場する女性キャラクターの描写も男性キャラクターと大きな格差がある。作中で性的で魅力的と言及される割合は男性キャラクターが7.4%であるのに対して女性キャラクターは29.2%となっており、衣服を脱ぎ裸体が映される割合は男性キャラクターの8.5%に対して女性キャラクターは27.3%と、男性に比べて女性の方が圧倒的に性的なイメージを背負い続けていることがわかる。

また、作品ごとのジェンダー間の偏りを測る手段の一つとして知られるのがベクデルテストだ。これは漫画家アリソン・ベクデルが考案した基準で、1985年発表のコミック『The Rule』にて初めて紹介された。漫画の中で二人の女性が映画を観るときの基準として3つのルールを挙げており、1つ目は女性キャラクターが2名以上登場すること、2つ目は女性キャラクター同士で会話をする事、3つ目はその会話の内容が男性以外についてであることだ。2013年に行われた調査では、1990年から2013年に公開された映画の中で、このテストに合格するのは約半数であるとしており、近年においても大きな進歩は遂げられていない⁽⁸⁾。例えばマーベルシリーズの2012年の作品である『アベンジャーズ』においては、女性スパイのブラック・ウィドウやアイアンマンの秘書であり恋人でもあるペツ

パー・ポッツなど複数の女性キャラクターが登場するが、彼女たちが会話することはないためこのテストにはパスしない。もともと研究のために考案された基準ではないこともあり、この指標が常に有効というわけではないが、これほど単純で一目簡単にクリアできそうな基準を現在もおよそ半数しか通らないというのは注目すべき事実だ。さらに興味深いのはこのテストの合否が作品製作にかけられる予算と相関関係にあるということだ。テストをパスする作品ほど予算は小さくなっており、これはハリウッドが伝統的に男性の観客をメイン層と想定し、女性の物語にはあまり積極的に投資してこなかったという歴史が背景にある。ただし2017年にアメリカ映画協会が実施した調査によればチケット購入者の51%が男性、49%が女性でほとんど差がついておらず、こうしたスタジオの傾向は合理的なものというよりも、変化とリスクを恐れるが故の決定と言えるだろう⁽⁹⁾。

さらに、ベクデルテストをジャンル別に検討した調査もあり、ここでは22のジャンルのうち、アクション映画における格差は下から4番目の水準と、このジャンルにおいて女性の表現が特に偏りがあることも分かる⁽¹⁰⁾。このように女性監督が圧倒的に少ない現状を反映して作品の内容にも偏りが生まれていることが量的にも示されている。

(3) 抗議運動とその問題点

ハリウッドは作品の中でも製作現場でもジェンダーに関する問題は山積みではあるが、近年大きなフェミニズムのうねりも起きている。2017年以降大きな発展を遂げたMeToo運動やそれに続くTime's Up運動がその代表格と言えるだろう。MeToo運動は2006年にアフリカ系アメリカ人活動家のタラナ・パークによって性暴力サバイバーの連帯のために提唱された後、2017年10月に『New York Times』でハリウッドの映画プロデューサーであるハーヴェイ・ワインスタインによるセクシャル・ハラスメントの特集が掲載され、それに続く形で女優のアリッサ・ミラノがTwitterにて「#MeToo」という言葉とともに性暴力やセクシャル・ハラスメントの経験を共有することを呼びかけたことで一大ムーブメントとなった⁽¹¹⁾。こうした動きはハリウッドに留まらず、呼びかけから1年以内に1900万件以上のTwitter投稿があり、世界各国の様々な業種においてこれまで公にされてこなかった被害を顕在化させた⁽¹²⁾。Time's Up運動はこれに続く形でハリウッドの著名人によって立ち上げられた運動で、2018年1月1日に『New York Times』にてゴールデングローブ賞授賞

式で黒い服で抗議の意を示すよう呼びかけが行われたり、職場での告発をサポートするための司法支援資金が設立されたことなどが主な活動となった⁽¹³⁾。こうした一連の動きはハリウッドのみならずあらゆる性暴力の現状を改善する大きなきっかけとなると同時に、その渦の中心としてハリウッド及び映画産業は大きな変革の時を迎えた。

一方でこうした活動にも問題点はある。特に注目すべきはこうした運動の中で人種に関する不均衡が起こっている点だ。大きな社会現象となったMeToo運動だが、そもそもは先述の通りアフリカ系アメリカ人であるパークが発足したものであり、その地道な活動から10年以上経過した後白人の女優であるミラノが同じ言葉を使い呼びかけたことで世界的なムーブメントに発展したという事実は、社会がこうした告発を発言者によって等しく扱ってこなかったことを示している。性暴力に関する人種間の不均衡はアフリカ系イギリス人女優のタンディ・ニュートンも告発しており、自身が撮影中やオーディションにおいて受けた不適切な性的接触を2013年の時点で告発すると同時に、「黒人であるということは大きな意味を持つ。(中略)若い黒人女性がレイプされても映画業界は気にも止めない。私自身が黒人は見過ごされるという証拠だ」と述べている⁽¹⁴⁾。また、著名人の告発が注目を集めることで運動を構成していた市井の人々の告発が矮小化され、埋もれてしまうという問題もある。パークは2020年のインタビューで「この運動が一般のサバイバー達の上に築かれているという事実を私たちは忘れかけている」と、大きな社会的影響力を持たない人々の経験と告発を軽視しがちな風潮に対して警鐘を鳴らしている。さらに、こうした告発を行なった被害者に対して証拠を求めて真偽を疑う、被害を矮小化する、被害者側の責任を問うなどによって被害者を精神的に攻撃する、いわゆるセカンドレイプも散見される。パークは先述のインタビューで、2017年に運動が広がり始めた際にこうした被害をまず危惧したと述べているが、それまでの彼女の活動においては、性暴力サバイバーが身元をオンラインで公開した上で被害を告発することはあり得ないことだった。

このように最初の提唱者の手を離れて大きく軌道を変えながら発展したMeToo運動は、結果的に各界で権力を振るっていた男性が職を追われることになり、社会全体に大きな影響を与えた。その過程においては、セクハラで告発された男性が法的な手続き抜きで解雇されるなど司法を超えた力を持つことに対して、「ハンドメイド・テイル／侍女の物語」の原作で知られるカナダ人作家のマーガレット・アトウッドが加熱する運動の問題

を指摘している⁽¹⁵⁾。また、フランスでは女優のカトリーヌ・ドヌーブを含む女性 100 人が、男性が女性を誘うのは犯罪ではないと公開書簡で主張するなど、一連の運動には男女問わず賛否の声が湧き上がった⁽¹⁶⁾。

こうした動きと並行して、アカデミー賞を主催する映画芸術科学アカデミーは 2016 年に女性やマイノリティを中心に、賞の選考で投票権を持つ新たなメンバーを約 700 人追加するための招待状を送るなど、ハリウッドにおける多様性を拡大する動きもとっている。これにより、2020 年時点で女性のアカデミー会員は 3179 人 (33%) となり、2015 年の 1446 人 (25%) と比べると人数は倍増している⁽¹⁷⁾。さらに 2020 年 8 月には、2025 年以降に作品賞にノミネートされる条件として、少数派グループ (女性、人種・民族的マイノリティー、性的マイノリティー、障害者など) を規定し、キャスト、意思決定者 (製作陣や部門ごとのリーダー)、見習い (インターンシップや研修生など)、顧客と関わる部門 (広報やマーケティングなど) の 4 つの項目のうち 2 つ以上で少数派グループを一定の割合以上で起用することを義務付けた⁽¹⁸⁾。現時点でも多くの問題が残っているものの、ここ数年のハリウッドの変化は大きく、重要な転換点を迎えていると言えるだろう。

2. 女性監督とアメコミ映画「ワンダーウーマン」を例に

(1) 製作体制

本章では、ハリウッドにおける問題とその改善への動きを背景に 2017 年に製作された『ワンダーウーマン』をフェミニズムの観点から考察する。冒頭でも述べたようにこの作品は女性が主人公のヒーロー映画を女性が監督した非常に稀有な例であり、女性が監督や映画製作の現場において重要なポジションを獲得する機会が増える節目となった。もちろん、本作がきっかけでそうした動きが始まったというよりは、同時発生的に各所で企画が進行していたという方が正確だろう。例えば同じ DC コミックスの『ハーレイ・クインの華麗なる覚醒 BIRDS OF PREY』の企画は本作が公開されるより早く 2015 年に始まっており、企画を主導したマーゴット・ロビーは女性監督を念頭に置いていた可能性が高い。しかし本作が女性の監督作品としては過去最高の興行収入である 8.2 億ドル以上の記録を残し、Rotten Tomatoes で批評家から 93%、一般観客から 83% という高い支持を受けたことが後発の女性ヒーロー映画、女性監督映画の企画を後押しし

たのは間違いないだろう⁽¹⁹⁾。本節ではこうしたハリウッドにおけるフェミニズムの記念碑的な存在となった本作の製作体制をまずは見ていきたい。

第一に注目すべきはこの作品の監督がパティ・ジェンキンスという女性であったことだ。彼女はテレビ業界でキャリアを積んだ後、2003年に実在する連続殺人犯であるアイリーン・ウォーノスを題材にした映画『モンスター』で長編映画デビューを果たした。主人公の娼婦を演じたシャーリーズ・セロンがアカデミー賞やゴールデングローブ賞、ベルリン国際映画祭のような名だたる賞の主演女優賞を受賞し、作品自体もアメリカン・フィルム・インスティテュート・アワードで作品賞を獲得、Rotten Tomatoes では批評家と観客のいずれも81%と高い評価を受けたが、ジェンキンスが『ワンダーウーマン』で監督2作品目を手掛けるまでにおよそ14年の時間を要しており、その背景には2007年の出産と育児の問題、女性監督を取り巻く状況、スタジオの製作時期に関する姿勢が関係している⁽²⁰⁾。マーベル・スタジオで2011年公開の『マイティ・ソー』の続編を監督する話も持ち上がっていたが、作品に対する考え方の相違により降板している⁽²¹⁾。また、ワーナー・ブラザーズに『ワンダーウーマン』の企画を持ち込んだが、当時クリstofァー・ノーラン監督によってバットマンの実写映画『ダークナイト』が進行中であったことなどを理由に企画が進まなかった⁽²²⁾。男女のキャラクターが登場する作品シリーズにおいて、男性キャラクターを主人公にした物語が優先され、女性の物語は後発で作られるという傾向はDCコミックを原作とした映画シリーズであるDCエクステンデット・ユニバースのみならずマーベル・スタジオにおいても見られるが、ジェンキンスの監督第二作品目が公開されるまでに10年以上の時間がかかった背景にはこうした状況があった。

こうした経験から、ジェンキンスは自分が映画業界において女性であることを強く意識させられたという。彼女の母親は熱心なフェミニストであり女性の権利について頻繁に話をしてきたため、そうした問題は過去のものであると考えていたが、『モンスター』で成功して以降初めて自身が単なる映画監督ではなく“女性の映画監督”なのだと感じ、女性であることが多くのごとに影を落としたとも話している⁽²³⁾。特に映画界における仕事のオファーに関しては確実にジェンダーによる違いを感じたとも述べており、初めてスーパーヒーロー映画を監督する男性監督には自身の7倍の報酬が支払われたことを取り上げ、こうした不公平に立ち向かう責任があると考え、降板も辞さずに交渉したことを明かしている⁽²⁴⁾。同時に、

自身が女性を代表する現状に対するプレッシャーも吐露しており、アメリカの連邦最高裁判事を務めたルース・バイダー・ギンズバーグのドキュメンタリーの中にある「もし自分が失敗したら女性全体の話になるため、優秀である必要があった」という言葉にこれ以上ないほど共感したと話している⁽²⁵⁾。男性が失敗を犯しても個人の問題として処理されるのに対して、女性の場合は問題が一般化されるという不均衡は映画界のみならず様々な場面で見られる問題だが、ジェンキンスがこうしたジェンダーにまつわる問題に『モンスター』以降意識的であり、実際にアクションを起こしているという点は強調しておくべきだろう。

また、本作は監督に限らず様々な部門のスタッフが女性で構成されていることも大きな特徴の一つだ。主演のガル・ガドットをはじめとしてスタッフも含む様々な人物が「他の現場では見たことのない数の女性がいた」と製作現場における女性の割合の高さを証言している⁽²⁶⁾。具体的には、衣装デザイナーのリンディ・ヘミングス、美術セットを担当するプロダクションデザイナーのアリヌ・ボネットなどの現場の仕事だけでなく、プロデューサーのデボラ・スナイダーやレベッカ・スティール・ローヴェンなど、作品製作の上層に位置するポジションも、男性メンバーと並列で数多くの女性がクレジットされている。プロデューサーのようなより大きな権限のあるポストに女性が就いていることは女性解放のシンボルとなってきたワンダーウーマンを描くうえで不可欠な要素であり、同時にこうした布陣であったからこそ、従来とは異なる女性の表現が可能になったと考えられる。

(2) 作中表現

本節では第1節で確認したような女性を中心とした製作体制のもとで生み出された表現の内容について論じていく。本作の主人公であるワンダーウーマンは、1941年にAll-American Publicationという出版社から出版されたコミック・ブック『All Star Comics』で初登場し、以後アニメやテレビシリーズなど様々なメディアを通して人気を博してきた。本作は彼女をメインキャラクターとして描く初の劇場用実写映画でワンダーウーマンの原点を描く物語であり、現代のパリで主人公ダイアナが過去を振り返るシーンから始まる。外界から隔絶され女性のみで暮らすセミスシラ島で育ったダイアナが、島に漂着した第一次世界大戦下のイギリスに協力するアメリカ兵であるスティーヴ・トレバーと出会うことで外の世界の状況を



図1 ロンドンで会議室からダイアナを追い出すよう指示を受けるスティープ



図2 ロンドンの街中でスティープに体を隠すよう求められるダイアナ

知り、軍神アレスが争いの原因であると確信、彼を倒しに外界へと旅立ち、20世紀初頭のヨーロッパの状況に困惑しつつ平和のために奔走するという物語だ。本作では主人公を性差別が存在しない世界から来た女性として設定することで、現実に存在する差別構造や不条理を描き出すことに成功している。図1と図2はいずれもダイアナがロンドンに来たばかりの場面だが、図1の会議のシーンでは女性が政治の場からいかに排除されてきたかを描き、図2では女性の体がいかに視線にさらされているか、隠すべきものとしてタブーにされているかを、そうした視線を理解しない、内面化していないダイアナの姿勢を通して描いている。本来本人の着たい服を着たいように着る権利があるはずだが、それを許さない社会の規範がここでは示されている。

作中のみならず現実の世界でもダイアナの衣装デザインは論争の種になり、ジェームズ・キャメロンが彼女の衣装に触れつつ「女性が監督したこと以外には大きな革新性はない」と述べるなど、批判の多くは肌の露出が多すぎるといったものだった⁽²⁷⁾。2017年の実写映画公開以前からワンダーウーマンの両義性は指摘されている。2016年に国連がワンダーウーマンを少女と女性の大使に任命しようとしたとき、太ももを露わにボディースーツとニーハイブーツを身に着け、大きな胸でスレンダーという現実には不可能なプロポーションのキャラクターをこうしたポジションに置くべきではないという抗議活動が起こり、約4万5000人がこれに参加している⁽²⁸⁾。2017年に公開された本作も、現存する女性ヒーローの中で最も強く長い歴史を持つキャラクターがコルセットと水着で戦うことでジェンダーをめぐる現状を肯定していると批判された。冬のドイツが舞台の場面で雪が降るような地域であるにも関わらず、非常に露出の多いアーマーのままなのは確かに不自然である。図3を見ると、ダイアナと仲間の男性スパイであるスティープの服装の違いが分かりやすい。ともに戦っている仲間や敵がかなり重装備なのに対して、女性のダイアナだけが薄着であるこ



図3 冬のドイツで戦うダイアナと人間の男性スティーヴ・トレバー

とで彼女の身体や女性性を強調してしまうため、先ほど紹介したような批評が生まれるのも当然といえるだろう。

しかし、ワンダーウーマンは描かれ始めたコミックスの段階から近年のアニメ作品及び実写ドラマに至るまで、基本的に同じコスチュームを着ておりそれが一つのアイコンにもなっているため、従来のデザインを大きく逸脱しないようにする必要があったことだろう⁽²⁹⁾。またダイアナの出自には複数のパターンが存在するが、いずれの場合でもギリシャ神話の神から命を与えられており人間ではない。西洋絵画ではボッティチェリの《春》やルーベンスの《パリスの審判》などに代表されるように、しばしばギリシャ神話の神々を裸体で描くことがある。周囲の人間とは異なる露出の高いダイアナの衣装は他の人間との違いを示す、彼女の神性の象徴とも言えるだろう。だが、本作の後に公開された男性監督による同じシリーズの映画『ジャスティス・リーグ』における衣装と比較すると、かなり露出が控えられていることは間違いない(図4、図5)。いずれも同じ色を基調としたスタイルとしては酷似した衣装だが、特に腹部の肌の見え方には大きな差がある。ダイアナよりもデザインの自由度が高いアマゾネスの衣装においては、特に明確に違いが表れている。最も重要な点として、彼女は誰に強制されたわけでもなくこのアーマーを着ている。ダイアナが初めてロンドンにやってきたとき、20世紀初頭のアメリカ人男性であるトレバーは彼女の衣服を不適切なものと判断し、より当時の規範に沿う服装をさせるためにデパートに連れていく。そこでダイアナが試着する服はどれも動きにくく装飾に重きの置かれた衣装ばかりだ。彼女は「どうやってこんな服で戦うのか」と問う。そして実際に戦地で戦う際に彼女が身に着けるのは、彼女の出身地であり性差別にさらされていない女性が暮らすセミスィラ島のアーマーである。このアーマーは彼女が自ら選び取った選択肢であ



図4 『ワンダーウーマン』におけるアマゾネス



図5 『スーサイド・スクワッド』におけるアマゾネス



図6 戦闘シーンにおけるダイアナのクロスアップ

り、社会が求める規範ではなく自身のありたい姿を貫いた結果なのだ。

さらに撮影に関して言えば、身体部位の執拗なクロスアップによって女性キャラクターを性的刺激のために断片化することはない。ダイアナの身体にカメラが寄るのは彼女の身体能力を強調するためであり、決して異性愛男性の視線の快楽のためではない(図6)。

さらに、この作品が新しい戦う女像を提示したことも非常に重要だ。映画の冒頭、女性だけが住む島セミスシラが舞台となって物語は展開するが、そこで描かれる女性たちは非常に多様性に富んでいる。彼女たちの人種、体格、年齢、戦い方のスタイル、服装などはそれぞれ異なっており、画一的な基準や定型とは無縁だ。砂浜でのバトルシーンを撮影する際、女性の戦士のキャストで埋め尽くされたセットを見て主演のガドットが「こうした光景を見たことがない」と涙したとジェンキンスは語っており、自身も「これまでこうした光景を見たことがないと気づいてすらいなかったが、当然女性も戦うことができるのにどうしてこれが作られてこなかったのか」と話している⁽³⁰⁾。この発言からは、従来のハリウッド映画における偏りをジェンキンスでさえも自然なものとして内面化していたという側面と、同時にそうした無意識下での男女格差の是認を克服し、新たな表現を生み出したという事実が現れている。

これまでもハリウッド映画において戦う女性はたびたび映像化されてきたがそのほとんどが男性監督によるもので、いくつかのパターンに当てはめられることが非常に多い。クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル』(Vol. 1 および Vol. 2, 2003-2004年) やポール・W・S・アンダーソン監督のバイオハザードシリーズなどに見られる、細身でクール、ミステリアスな白人美女、というのがこのパターンの一つと言えるだろう。もちろんそうした女性を描くこと自体が悪いわけではないが、一つの型を繰り返し描くことで画一的な価値観が形成されるのは問題である。第1章で指摘した通り、実際の社会の人口の比率と映画に登場するキャラクターの多様性は歴史的に乖離し続けており、数少ない女性キャラクターさえも典型的な表現に留まってしまえば、現実の女性の中にある多様性を見過ごすことになってしまう。つまりステレオタイプの問題の本質は、男性に比べて十分な多様性が存在していないことにあるのではないだろうか。もし多様性が十分示されるだけの表象が歴史的に存在していれば、ある作品におけるある一人の女性として“クールでミステリアスな戦う美女”という表象も許されるべきだろう。しかし女性表象自体とその種類が少ないがために、そこで描かれているものだけが自動的に女性を代表するものになり、こうした問題が生じるのではないだろうか。女性のアクションヒロインはハリウッドの中に存在してきたが、男性のそれに比べてあまりにも少なく、女性のアクションヒロインの多様性を担保するだけの土壌があったとは言い難い。こうした意味で『ワンダーウーマン』において多様な女性像が描かれたことは非常に意義深い。図7は本作に登場する女性のごく一部だが、筋骨隆々というのは過去の映画ではあまり見られない女性像であり、そうした女性を描くこと自体に意味がある。

また女性の内面の描写にしても、ダイアナがロンドンで初めてアイスを食べて無邪気に喜ぶ姿など、一人の女性を「戦う無機質なお人形」以外の形で描いている点でも男性監督によるアクション映画とは一線を画している。こうした表現は、1976年に公開され人気を博したテレビドラマ版の影響も大きいだろう。ジェンキンスは当時テレビでワンダーウーマンを見た少女の一人として刺激を受け「反抗的か女性的か、魅力的か強くあるのかのどちらかを選ぶ必要はないと学んだ」と発言しており、2017年の『ワンダーウーマン』におけるダイアナの多面的な人物造形に影響を与えたと考えられる。本作に登場する女性たちは、処女か主婦か母親というような限られたパターンには収まっておらず、一人の女性が対立すると考えられ



図7 様々な人種・体格のアマゾネス

てきた要素も含む様々な側面を持っていることは自然なことであるというジェンキンスの考えが如実に表れている。

ここまで『ワンダーウーマン』における女性の表象を追ってきたが、一方で男性がいかにか描かれているかについても触れておきたい。印象的なのが、女性だけが住む島セミスシラではマイノリティとなる人間の男性スティーブの描き方だ。彼がお風呂に入っているところにダイアナが来るシーンで、ダイアナはスティーブの体をかなり無遠慮に眺める。ここでスティーブは終始気まずい表情で話をしているが、先述のロンドンでのシーンとは逆に男性の体が視線にさらされ、従来のハリウッド映画における「視線の主体である男性とその対象となる客体の女性」という構造を男女で逆転して見せることでモノとして見つめられることの居心地の悪さが浮き彫りになり、その不当性や非対称性を暴くことに成功している。こうした差異に気づき映像化する視点を持つことには、男性とは異なる劣った性として他者化されてきた女性が作り手となることが寄与していると考えられるだろう。

ここまで確認したように本作は女性のエンパワー映画としてみることができるが、それだけにとどまらず男性との建設的な共存関係の可能性も描いている。この映画では繰り返し人間の世界は「Man's world」と表現され男の世界であることが強調されており、争いを永遠に繰り返す暴力的なものとして描かれるが、最終的にダイアナは女性だけの世界を抜け出し、男性と共存する道を選ぶ。本作は女性監督による女性の物語ではあるが女性のみならず男性も共感できる物語でもあり、程度の差はあれど観客はそのジェンダーに関係なく主人公ダイアナに同一化することが可能だ。結果として女性観客だけでなく多くの男性観客にも肯定的に受容され、8.2億ドルを超える興行収入を収めることに成功している。アメリカ最大規模の一般大衆誌である『USA トゥデイ』から「女性のスーパーヒーロー映画

である時点で十分に革新的だが、陳腐な公式を捨て去った驚くべき映画だ。(中略)そして何よりも人間性についての希望に満ちた物語だ」と評されるなど、単純に女性を主人公にしたアメコミ映画であるという事実を超えて、人間性という普遍的な問題に言及した作品であることが評価されている⁽³¹⁾。もしダイアナが最大の敵であるアレスを倒した後にセミッシラ島に帰り、女性だけの社会を選び取ってれば、商業的にここまでの成功を取めることなくその後続く女性監督によるアメコミ映画のあり方も違ったかも知れない。

3. 女性が映画を撮ること

ここまでフェミニズム的観点から『ワンダーウーマン』の革新性を検討してきたが、本章ではアメコミ映画において女性監督が女性の物語を撮る意義について考察する。第2章で確認したように、本作では女性を行動する主体でありセクシズム的な規範から自由な存在として描き、特定の枠にあてはめるのではなく多様な女性像や一人の女性の多面性を描くということに成功している。またこうしたメッセージを受け取ったのは大人だけではない。幼稚園で働く保育士がTumblerに「アイアンマンに夢中だった男の子がワンダーウーマンの弁当箱を欲しがっている」「小さな女の子が将来ダイアナのように数百の言語を話せるようになりたいと言っている」と投稿し大きな話題を呼んだ⁽³²⁾。投稿者は「ゲームの遊び方やスーパーヒーローの見方、子どもたち同士の関わり方が変わった。だからこそ女性が主役の映画が重要であり、女性が主導する映画が重要なのだ」と話している⁽³³⁾。

この映画が女性のエンパワーメント映画として成立したのは、フェミニズムの象徴であるワンダーウーマンというキャラクターを描いた作品であることと同時に、監督であるジェンキンスが映画界において女性であることを強く認識した人物であることが大きく影響しているだろう。彼女のような成功した女性監督が輩出されるのは大きな進歩だが、やはりそのサンプル数は非常に少ないと言わざるを得ない。当然ながら同じ女性監督であってもその関心事や表現の方法は千差万別であり、女性に対する抑圧の形も人種・セクシャリティ・階級などによって異なるという議論はテレサ・ド・ローレティスが1895年の時点で指摘した通りである⁽³⁴⁾。ジェンキンスが『ワンダーウーマン』で一人の女性の多面性や高潔さを描き、男

性中心の社会で規範に対抗する女性像を描いたことにはフェミニズム的な作品としての力があるが、例えばそこに白人以外の女性の物語も十分に描かれているとは言えず、本作品だけで女性の多様性が担保されたとは言い難い。これは2020年に公開された続編『ワンダーウーマン 1984』においても同様であり、ペドロ・パスカル演じる敵役の息子にアジア系のルシアン・ベレスを起用した以外にはメインキャラクターに有色人種はおらず、もう一人の敵となるチーターを演じたのも白人女性であるクリスティン・ウィグと、人種に関しては積極的に多様性を反映させてはいない。人種とジェンダーの問題は不可分であり、重要なのは多様な角度から性差別的な社会構造・社会規範を指摘し破壊することだ。そのためには多種多様な表現が数多く生み出される必要がある。

また、『ワンダーウーマン』は力強い女性像を描くことに成功しているが、暴力によって問題を解決するというストーリー自体は他のヒーロー映画と構造的には何も変わっていない。ロバート・ステムとルイス・ベンスは1983年の人種差別に関する論文「映画表現における植民地主義と人種差別」において「ただ新しいヒーローやヒロインを投入するだけで、あとは何もしようとしない天真爛漫な差別廃止主義についても、やはり懐疑の目を向ける必要がある。ここでのヒーローやヒロインは今度は被抑圧者階級から選ばれてはいるものの、役柄自体は依然変わっていない。すなわち、かれらが演じているのは、昔ながらの、本来的に抑圧者側に属する人物なのである」としており、根本的な差別構造を踏襲する形での表現の問題を指摘している⁽³⁵⁾。こうした点を考慮してもやはり一つの女性映画、一握りの女性監督が登場するだけではハリウッドの状況を覆すには不十分で本質的に不可能であり、さらなる女性監督による女性の物語が必要とされている。

このような女性による表現を拡張するうえでアメコミ映画は一つの革新的な創造の場となり始めており、それはある種必然であったといえるかも知れない。本稿で取り上げたワンダーウーマンや、同じくDCコミックのハーレイ・クイン、マーベル・コミックのブラック・ウィドウなどは、いずれも現実離れた女性キャラクターだ。ワンダーウーマンは戦車を持ち上げ、腕から光線を出すこともできる神の子孫であり、ハーレイ・クインは化学薬品に自ら飛び込みあらゆる犯罪をもものともせずに自由に生きる元精神科医、ブラック・ウィドウは宇宙からの敵とも戦う元ソ連の女スパイだ。彼女たちは非現実的なスーパーパワーを持つキャラクターが生き

る荒唐無稽な世界の住人であり、社会の規範や現実世界の制限を超えた存在である。アメコミ映画の世界において物語の中心となるのはほとんど男性キャラクターであったことは事実だが、それでもその中で一定数の女性キャラクターが存在し彼女たちも男性と同様にスーパーパワーを駆使して戦ってきた。こうした背景を考えれば、現実世界の性差別的な規範にとらわれることのない女性キャラクターが既存のイデオロギーを破壊する映画が、アメコミ映画という形で作られるようになったことは偶然ではないだろう。

おわりに

本稿ではハリウッドにおけるジェンダーにまつわる問題を整理し、『ワンダーウーマン』をフェミニズムの観点で検討することで、女性が映画を作ることの意義を探ってきた。本作は間違いなくフェミニズム的観点を意識したつくりになっているが、ここまで徹底した方針は作り手が女性であったことが一因であることは間違いないだろう。ただしこの事実はある意味で憂慮すべき事態であることも意識しておかなければならない。現在のハリウッドおよび社会全体においてまだ十分に男女の格差が解消されていないからこそこうした表現が生まれるのであり、第2章で指摘したような既存の社会構造への反発を示す表現などは、ジェンダーに関わる問題が広く浸透していることが前提にあるからだ。また、男性監督は自らが作る映画を「男性による映画」とは認識しないし、まして「男性の視点を代表する責任を負う」とも考えてはいないが、ジェンキンスはこの問題について苦悩したうえで作品を生み出している。もちろんすべての女性監督がこうした考えに基づいて作品を作っているわけではないが、今のハリウッドで女性キャラクターを主人公とし女性として作品を作るうえでは、まず女性の表現について過去の定型を覆すことから始めざるを得ない。これは現在のハリウッド映画において女性が映画を撮ることの意義でもあるし、ある種の業とも言えるだろう。こうした状況を覆すには、女性が映画の製作にかかわる機会を増やし、様々な女性による多様な表象を増やすしかない。作品の規模にかかわらず監督の性別が同数程度に増え、ベクデルテストを男女反転させても同じ数値になったとき、本当の意味で同じ立場で作品の製作ができるようになるのだ。

注

- (1) Smith, Choueiti, Pieper, Yao, Case & Choi, "Inequality in 1,200 Popular Film."
- (2) Sundance Institute, "2013 Sundance Film Festival Announces Films in U.S. and World Competitions."
- (3) Dargis, "In Hollywood, It's a Men's, Men's, Men's World."
- (4) Ibid.
- (5) Martinson, "Star Wars new female character 'extremely significant,' says producer."
- (6) Buchanan, "5 Dumb Reasons Why Hollywood Won't Hire Women Directors."
- (7) Smith, Choueiti, Pieper, Yao, Case & Choi, "Inequality in 1,200 Popular Film."
- (8) Hickey, "The Dollar-And-Cents Case Against Hollywood's Exclusion of Women."
- (9) Movieguide, "Who Goes to the Movies?"
- (10) Mariani, "Visualizing the Bechdel test."
- (11) マッケン『フェミニズム大辞典』、324頁。
- (12) Dalvin Brown. "19 million tweets later."
- (13) マッケン、前掲、337頁。
- (14) Sanchez, "Thandie Newton Opens Up About Surviving Sexual Assault as a Teenager."
- (15) *BBC News*, "Margaret Atwood faces feminist backlash for #MeToo op-ed."
- (16) *BBC News*, "Catherine Deneuve defends men's 'right to hit on' women."
- (17) Academy of Motion Picture Arts and Sciences, "A2020 ACCOMPLISHMENTS."
- (18) *BBC News*, "Oscars: Only diverse films will be considered for best picture."
- (19) Rotten Tomatoes, "Wonder Woman."
- (20) Rotten Tomatoes, "Monster."
- (21) Cheng, "Why Director Patty Jenkins Left Marvel's 'Thor 2.'"
- (22) Jenkins, "Happy Sad Confused."
- (23) Ibid.
- (24) Ibid.
- (25) Roth, "Patty Jenkins keeps making hits. The costs of not doing so are too high."
- (26) 『ワンダーウーマン』Blu-ray、特典映像。
- (27) Nevins, "James Cameron repeats Wonder Woman criticism."
- (28) McCann, "U.N. Drops Wonder Woman as an Ambassador."
- (29) Fawcett, "Infographic."
- (30) Jenkins, "Happy Sad Confused."
- (31) Lawler, "Review: 'Wonder Woman' is the fresh, hopeful superhero movie we need."
- (32) Rosa, "This Post About a Kindergarten Class's Reaction to 'Wonder Woman' Is Going Viral."
- (33) Ibid.
- (34) ド・ローレティス「女性映画再考」。
- (35) スタム／スペンス「映画表現における植民地主義と人種差別」。

引用文献

- Academy of Motion Picture Arts and Sciences. "A2020 ACCOMPLISHMENTS." https://www.oscars.org/newmembers2020/pdf/2020_new_members_overview.pdf
- BBC News. "Catherine Deneuve defends men's 'right to hit on' women." January 10, 2018. <https://www.bbc.com/news/world-europe-42630108>
- BBC News. "Margaret Atwood faces feminist backlash for #MeToo op-ed." January 16, 2018. <https://www.bbc.com/news/world-us-canada-42708522>
- BBC News. "Oscars: Only diverse films will be considered for best picture." September 9, 2020. <https://www.bbc.com/news/entertainment-arts-54082567>
- Brown, Dalvin. "19 million tweets later: A look at #MeToo a year after the hashtag went viral." *USA Today*, October 13, 2018.
- Buchanan, Kyle. "5 Dumb Reasons Why Hollywood Won't Hire Women Directors." *VULTURE*, November 5, 2015.
- Cheng, Susan. "Why Director Patty Jenkins Left Marvel's 'Thor 2.'" *BuzzFeed*, May 26, 2017. https://www.buzzfeed.com/susancheng/patty-jenkins-thor-2?utm_term=.ps4peJZQo#fqeWzgr40
- Dargis, Manohla. "In Hollywood, It's a Men's, Men's, Men's World." *The New York Times*, December 24, 2014. <https://www.nytimes.com/2014/12/28/movies/in-hollywood-its-a-mens-mens-mens-world.html>
- ド・ローレティス、テレサ「女性映画再考」齊藤綾子訳、岩本憲児／武田潔／齊藤綾子編『新映画理論集成1 歴史／人種／ジェンダー』フィルム・アート社、1983年
- Fawcett, Kirstin. "Infographic: The Evolution of Wonder Woman's Look." *Mental Floss*, March 25, 2016. <https://www.mentalfloss.com/article/77649/infographic-evolution-wonder-womans-look>
- Gosling, Sharon. *Wonder Woman: The Art and Making of the Film*. Titan Books, 2017.
- 浜野佐知『女が映画を作るとき』平凡社、2005年
- ハスケル、モリー『崇拜からレイプへ——映画の女性史』海野弘訳、平凡社、1992年
- Hickey, Walt. "The Dollar-And-Cents Case Against Hollywood's Exclusion of women." *FiveThirtyEight*, 2014. 参照日：2021年4月7日。 <https://fivethirtyeight.com/features/the-dollar-and-cents-case-against-hollywoods-exclusion-of-women/#:~:text=The%20Dollar%2DAnd%2DCents%20Case%20Against%20Hollywood's%20Exclusion%20of%20Women,-By%20Walt%20Hickey&text=We%20found%20that%20the%20median,all%>
- Jenkins, Patty. "Happy Sad Confused." *Apple Podcast*, December 16, 2020. <https://podcasts.apple.com/us/podcast/patty-jenkins/id827905050?i=1000502545048>
- Lawler, Kelly. "Review: 'Wonder Woman' is the fresh, hopeful superhero movie we need." *USA Today*, May 30, 2017. <https://www.usatoday.com/story/life/movies/2017/05/30/review-wonder-woman-is-the-superhero-movie-we-need/102166936/>
- ルポール、ジル『ワンダーウーマンの秘密の歴史』鷺谷花訳、2019年、青土社
- Mariani, Daniel. "Visualizing the Bechdel test." *Ten Chocolate Sundaes*, June 25, 2013. <http://tenchocolatesundaes.blogspot.com/2013/06/visualizing-bechdel-test.html>

- Martinson, Jane. "Star Wars new female character 'extremely significant,' says producer." *The Guardian*, October 14, 2015. <https://www.theguardian.com/film/2015/oct/14/star-wars-new-female-character-extremely-significant-says-producer>
- McCann, Erin. "U.N. Drops Wonder Woman as an Ambassador." *The New York Times*. December 13, 2016. <https://www.nytimes.com/2016/12/13/world/un-wonder-woman-campaign.html>
- マッケン、ハンナ『フェミニズム大辞典』最所篤子／福井久美子訳、三省堂、2020年
 Movieguide. "Who Goes to the Movies?" 参照日：2021年5月30日
- マルヴィ、ローラ「視覚の快楽と物語映画」斎藤綾子訳、岩本憲児／武田潔／斉藤綾子編『新映画理論集成1 歴史／人種／ジェンダー』フィルム・アート社、1983年
- Nevins, Jake. "James Cameron repeats Wonder Woman criticism: 'That's not breaking ground.'" *The Guardian*, September 27, 2017. <https://www.theguardian.com/film/2017/sep/27/james-cameron-defends-wonder-woman-criticism>
- Rosa, Christopher. "This Post About a Kindergarten Class's Reaction to 'Wonder Woman' Is Going Viral." *GLAMOUR*, June 13, 2017. <https://www.glamour.com/story/this-post-about-a-kindergarten-class-reaction-to-wonder-woman-is-going-viral>
- Roth, Daniel. "Patty Jenkins keeps making hits. The costs of not doing so are too high." *Linked in*, January 28, 2019. <https://www.linkedin.com/pulse/patty-jenkins-making-hits-downsides-doing-so-too-daniel-roth>
- Rotten Tomatoes. "Monster." <https://www.rottentomatoes.com/m/monster>
- Rotten Tomatoes. "Wonder Woman." https://www.rottentomatoes.com/m/wonder_woman_2017
- Samantha, Mann. "'Gentlemen Prefer Blondes' Is A Feminist Buddy Comedy." *BUST*. 参照日：2020年4月8日. <https://bust.com/movies/195595-gentlemen-prefer-blondes.html>
- Sanchez, Chelsey. "Thandie Newton Opens Up About Surviving Sexual Assault as a Teenager." *BAZAR*, July 7, 2020. <https://www.harpersbazaar.com/celebrity/latest/a33236826/thandie-newton-opens-up-surviving-sexual-assault/>
- Smith, Dr. Stacy L., Mark Choueiti, Dr. Katherine Pieper, Kevin Yao, Ariana Case & Angel ChoiMarc. "Inequality in 1,200 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2018." *USC Annenberg*, 2019. <https://assets.uscannenberg.org/docs/aii-inequality-report-2019-09-03.pdf>
- スタム、ロバート／ルイス・スペンス『映画表現における植民地主義と人種差別 序説』奥村賢訳、岩本憲児／武田潔／斉藤綾子編『新映画理論集成1 歴史／人種／ジェンダー』フィルム・アート社、1983年
- Sundance Institute. "2013 Sundance Film Festival Announces Films in U.S. and World Competitions." November 28, 2012. <https://www.sundance.org/blogs/news/2013-sundance-film-festival-announces-films-in-u-s-and-world-competitions>
- 塚田幸光『シネマとジェンダー アメリカ映画の性と戦争』臨川書店、2016年